

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Jessadakorn Kalapong
論文題目	Emerging Middle-Class Aspirations through Labour Migration: An Ethnography of Thai Technical Intern Trainees in Japan (新興中間層の出稼ぎを通じた自己実現－日本のタイ人技能実習生の民族誌－)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日本におけるタイ人技能実習生の民族誌的記述を通じ、出稼ぎ労働者の出身国における社会経済的背景と日本での滞在中に課せられる構造的制約のなかで、当事者たちがいかにして主体性を構築しているかを明らかにするものである。日本各地で様々な職業に就いているタイ人技能実習生への聞き取り調査と住居訪問やイベントへの参加などの参与観察を併用することで、彼ら出稼ぎ労働者たちの感情、思考、意味付けなどの主体性を抽出することが本論文では試みられている。</p> <p>第1章は序論である。技能実習生を含む労働力の国際移動は、これまでの先行研究ではプッシュ要因、プル要因などのマクロ経済的要因によって説明される傾向が強かった。こうした研究で描かれる労働者は、単に国際政治経済環境の従属変数たる受動的な存在でしかない。それに対し本論文では、参与観察を伴う民族誌的研究により、当事者自身の主観や主体性という視点から国際労働移動をとらえ直すことが提唱される。</p> <p>第2章では技能実習生の制度的背景が検討される。技能実習制度 (TITP) というのは、1993年に日本が正式に開始したもので、未熟練労働者の受入制限という建前を維持しながら、なおかつ未熟練労働力の不足を補う「裏口」として位置づけられてきた。ただしこれは、受け入れ国としての日本側の制度だけで完結するものではない。本論文では、送り出し国としてのタイ側での制度整備にも着目し、そこでは政府による人材選抜と、民間エージェントによるリクルート活動の2つのチャンネルが存在し、出稼ぎ予備軍がそれぞれの事情に応じてこのチャンネルを使い分けていることも明らかにされる。</p> <p>第3章は、タイ人出稼ぎ労働者たちの変遷を、母国での社会構造の変化という文脈に位置づけて考察する。1970-90年代までのタイ人海外出稼ぎは、主に農村の貧困を前提としたものであった。しかし1980年代からの経済成長の結果として、タイ農村部での生活の底上げが進展し、農民達もまた中間層化していった。ただしこうした新興中間層は、既存の中間層エリートからは依然として社会的・経済的に劣位に置かれている。日本での技能実習を含むタイ人の海外出稼ぎは、現在においてはさらなる社会的上昇によりこの劣位を改善する機会ととらえられている。</p> <p>ただしそこには矛盾も存在する。それは地位上昇のための海外出稼ぎが、少なくとも一時的には社会的な地位の下降を伴うという点である。この問題を検討するのが第4</p>			

章である。タイ人技能実習生には、本国で高等教育の学歴を有する者が少なからず含まれているが、彼らもまた技能実習の現場では、農園や工場での単純労働に従事させられ、また制度上の制約から雇用主を随意に変更することもできない。そうした環境を生きるために、人々は日本人雇用主への面従腹背的な態度、明示的な反抗などの抵抗を試みるが、その多くは忍耐によって不本意な現実をやりすごしている。

その一方で、人々は現在の不本意な環境を積極的に意味あるものへと作り替えようとも試みている。第5章では主に宗教の側面から、そうした試みを検討している。技能実習生の居住環境は概して劣悪であるが、そこに意味を付与するべく、人々は本国から持参した護符などを自作した祭壇に飾り、あるいは同僚のタイ人技能実習生たちとともに土地神祭祀を行うといったことを試みている。日本国内にタイ系仏教寺院は存在するがその数は少なく、全国に散在する技能実習生にとっては必ずしも身近な存在とはいえない。そのため、むしろ正統タイ仏教の周縁に位置するような微細な宗教的実践によって、技能実習生たちの生活空間は意味づけられている。

第6章では、技能実習期間終了後の将来設計について論じられる。技能実習生にとっては、実習期間の貯蓄を原資に自営業などでさらなる地位上昇をめざす、外国語の習得やあるいは海外での生活それ自体を目的に実習期間を延長する、あるいは第三国での出稼ぎをめざすなどの選択肢が存在する。そしてそれらは、実習生当事者自身が自分の将来に投影する願望によって規定されている。

第7章は結論である。経済成長により農民の中間層化が進む現在のタイにおいて、海外出稼ぎには従来とは異なる意味づけが与えられている。それはさらなる地位上昇を望む新興中間層たちの自己実現への衝動であり、本論文では、そうした人々の願望を内側から理解することにこそ、出稼ぎの民族誌的研究の新たな可能性があるという提言がなされている。

(論文審査の結果の要旨)

技能実習生制度というのは概して評判がよくない。単純労働者を受け入れないという建前を守りながらも、なおかつ3K（きつい、きたない、危険）労働の担い手を途上国出身者に転嫁するために考案された、日本国家や日本人事業主にとっての都合のよい手段であり、それによって立場の弱い途上国の労働者たちが雇用主を選ぶ自由すら剥奪された状態で重労働に甘んじさせられているからである。ではこの状況は、技能実習生当事者自身の目にはどう映っているのか。人々はこの不本意かもしれない状況をいかに意味づけながら日々を過ごしているのか。それは統計や法令からは見えてこない。あくまで人々の肩越しに世界を眺める参与観察の手法によってのみ明らかにしうる領域であり、本論文はこの課題に挑戦した意欲作だということができる。

本論文の学術的な意義は、以下の三点である。

その第一は、今述べたような出稼ぎイメージを大幅に相対化したことである。これまで国際労働移動は、持てる国と持たざる国の経済格差によって説明される傾向が強く、そこでは途上国出身の出稼ぎ労働者は、南北問題の単なる変数としての地位しか与えられてこなかった。また技能実習生についても、それは途上国の人々を使い捨て可能な3K労働力としかみなさない日本の欺瞞的な政策の被害者として扱われてきた。そこで等閑視されているのは当事者自身の視点である。本論文では、民族誌的な手法を用いることでこの課題に接近し、技能実習生は貧困のゆえに厳しい労働に甘んじているわけではなく、それぞれが将来への目標をもって一時的な地位の下降を受け入れており、しかもその生活をさまざまな方法で意味づけていることを明らかにしている。またそこからは、自己実現や自分探しといった、先進国の都市中間層の若者と大きく変わらない動機が大きな役割を果たしていることも示されている。

学術的な意義の第二は、タイ農村の中間層化という送り出し国側のマクロな社会変化の中に出稼ぎを位置づけていることである。農村の貧困によって押し出され、家族や親族を飢えから救うために重労働に耐える出稼ぎ労働者というイメージは、現在のタイ国には妥当しなくなりつつある。その背景にあるのは、タイ農村全体の生活の底上げである。農民達は少なくとも日々の糧に困ることはなくなり、子弟に高等教育を与えることも可能になってきた。総じていえば、1980年代以降のタイの農民は急激に中間層化しつつある。そうした前提の変化は、出稼ぎの主観的動機づけ自体にも反映されている。もはや中間層化した故郷の両親に対して送金の義務を負わず、自らの将来に投資するコスモポリタンな若者たちが、今やタイ人出稼ぎ者の少なからざる部分を占めるに至っていることを、本論文は示してくれている。

第三の意義は、技能実習という制度に対する複眼的な視点を提供しえていることであ

る。当然のことであるが、国際労働移動の場には送り手と受け手が存在する。技能実習制度という受け皿を日本側が用意したとしても、それが適切に稼働するには、送り出し国側の制度が連動する必要がある。これまでの技能実習制度に関する研究は、日本の労働移民受け入れ政策を所与のものとして、日本側の制度設計とその問題点に関心を集中させる傾向にあった。それに対し本研究は、タイ語資料の渉猟によって、タイ側の制度がいかにかに設計され、出稼ぎ予備軍に対していかなるリクルートを行っており、いかなる問題を招いているかをも並行的に論ずることで、技能実習制度が受け入れ側、送り出し側双方の協調によって維持されていることを明らかにしている。

以上のように本論文は、参与観察にもとづく出稼ぎの民族誌的研究という視点から、技能実習生たちの動機づけの論理を内側から明らかにするとともに、それを通じて国際労働移動をめぐる議論への新たな問題提起を行い、さらにそれをタイ社会論および日本社会論双方の文脈に位置づけるという試みであり、これら複数の分野のそれぞれに対して従来の視点の変更を迫る、きわめて優れた研究である。それは東南アジア地域研究や移民の社会学的研究のみならず、日本の労働移民受入制度をめぐる論考に対しても寄与するところが非常に大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。